

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所全体で、これまでの実践の中から学んだことを踏まえさらに研修・勉強会を重ね職員一人ひとりのスキルアップを図り「本人本位・利用者中心」の理念に基づいた支援に努めている。	ホーム独自の理念が作られており、玄関や各ユニットに掲げられている。運営主体の「職員理念」も作られている。新入職員には施設長が新人教育を行い、その課程の中に理念について説明する機会を設けている。理念に外れた行動を見かけた時には、職員間で話し合いを持ち、理念の再確認をし実践することを促している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自身が地域の一員として日常的に交流している	隣接する小学校との継続した交流会や地域にある中学校の職場体験の受入れ・地域の運動会へ招待して頂いたり、祭りに作品を出展したりと地域の一員として交流している。また今年度は職員が地域福祉活動策定委員として地域の活動に参加し地域の方との交流の場を増やすことが出来た。	隣組に加入し区費も支払い、地区の「ゆうわ祭」に入居者有志の書や各ユニットで制作したちぎり絵などの出品もしている。継続して年に3回ほど同じ小学生の訪問があり、小学校の「交流委員会」の児童たちもホームで入居者と交流している。入居者が玄関まで見送りに出るほど子供たちの訪問は楽しみの一つになっている。「あさかわ夏祭り」がホームで開催され、近隣住民や運営推進委員の方が参加されている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域福祉活動への参加を通し、他地区の活動として「認知症への理解」という題で施設長が話をさせていただいた。又来訪時相談にのったりアドバイスを行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進委員会への参加依頼を行い出来る限り参加してもらっている。会議にて事業所の実情やサービスの取り組みを伝え必要に応じアドバイスして頂き、日常のケアに活かしている。今年度はボランティアで来て頂いている傾聴の方にも参加して頂いている。	年に6回開催されている。ホームのある地区と隣の地区よりの民生委員などの参加があり全体的にメンバーが多い。入居者の現況やサービス提供の状況などを報告し、委員の方々からの意見や提案、情報なども頂いている。明瞭な議事録が作成されており、ホームでの入居者の状態などがよくわかる。今後、ご家族に会議録を見ていただくことも検討している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進委員会への参加依頼を行い出来る限り参加してもらっている。会議にて事業所の実情やサービスの取り組みを伝え必要に応じアドバイスして頂き、日常のケアに活かしている。安心相談員の訪問は毎月あり協力関係が築けている。	開設当初より市派遣の「介護あんしん相談員」の受け入れをしている。当初より同じ方なのでミニ旅行などへの参加もして頂いている。外部評価の結果の報告もしている。介護認定更新時には職員が立ち会い情報の提供をしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	ミーティング時を利用し身体拘束についての勉強会を行い職員は理解しており日常的に身体拘束を行うようなケアはしていない。	玄関の鍵は掛けていない。また出入りのチャイムの設置もしていない。新人教育時「身体拘束について」の研修も組まれており、ホームでは身体拘束は一切しないことを話している。外出したいという入居者には「どこまで行きますか」と聞き一緒に出かけ、入居者が疲れた様子を見せたら帰ってくる。生活の流れを入居者中心に考え職員が合わせている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることのないよう注意を払い、防止に努めている	虐待についても同様にミーティング時に勉強会を行っている。日常のケアの中でも職員間で気になる行為や言動には注意しあったりして防止に努めている。		

グループホームあさかわ・あじさいユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者は研修等で学ぶ機会を持ちミーティング時を利用し職員に周知している。現在まで必要のある利用者はいないが、必要時関係者と話し合い支援できる体制づくりは、出来ている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時等には、書面を使用し説明を行っている。不安や疑問には丁寧に対応し理解や納得をさせていただいている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進委員会に交代でご家族にも参加して頂き、要望等があればミーティング等で話し合い運営に反映させている。またホームのイベント時には必ず声をかけさせて頂き、参加して頂く中で意見等があれば気軽に言っていただくようにしている。	夏祭りやミニ旅行等行事の時に家族に声を掛け参加していただいている。家族同士の話し合いや職員と家族の話し合いが行事を通じて行われている。遠方の方には電話でコミュニケーションをとっている。入居者からの要望や苦情等を受けた時には職員のミーティングで話し合い、解決策を検討し、サービスや運営に活かしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月2回のミーティング時に全員参加(不参加時は必ず記録を見ることとしている)して話し合いを持っている。	一ヶ月に2回ホーム全体の会議が行われ、その後ユニット毎のミーティングをしている。ユニットのミーティングでは介護全般の具体的な質問や疑問を上げ、開設当初よりの職員と新規採用の職員とが解決方法や改善方法について共に話し合っている。施設長や管理者からの助言なども参考にしている。年2回人事考課を兼ね代表者との面談が行われ、アイデアや提案などをする機会がある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は、日常的に管理者や職員の顔が見える位置におり現場での職員の個々の努力や実績・勤務状態を把握し職場環境及び条件等の整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	代表者は、日常的に現場での職員個々の実際と力量を把握できる状況にあり経験年数や力量等を施設長及び管理者と相談し、事業所内外の研修を受ける機会の確保をし、職員一人ひとりのスキルアップを図っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホームネットワーク会議への参加をし勉強会や同業者との情報交換や意見交換をしている。相互訪問等については、今年度も各ホーム共に人員の問題もあり実現にいたっていないのが現状である。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人・家族とのコミュニケーションを取り、本人を中心とした生活あるいは本人のニーズをスタッフ全体で把握し合い、同様のサービスの提供に努め安心して過ごして頂けるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人同様コミュニケーションを取る中で、家族の不安や困っていること又要望に耳を傾け安心して頂けるよう努めている。又家族が県外など遠方のケースもあるため細目に連絡を取りコミュニケーションを図るよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	家族の実情や本人の意向を聞き、又ケアマネージャー等からも十分な情報を得るなどをし、見極めを行い他のサービス利用にての対応も考慮に入れた対応に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家事全般を業務として職員だけで行わず利用者とのかかわりの中で行っていけるようコミュニケーションの一つとして対応している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	行事・誕生日会などを通して可能な限り参加して頂いている。又日常の中でも都合の良い時は就寝前のケアを手伝って下さる家族の方も見受けられる。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	買い物や美容室など行きつけの場所があれば行けるよう支援しているが、中には知り合いの所は行きたくない方もいるので無理強いはいしない。	年末に帰宅しお正月を自宅で迎えホームに帰ってくる方や遠く離れている娘さんが長野に来て一緒に外泊するなど、個々の対応を支援している。昔からの行きつけの美容院の利用時に職員が送り迎えをし馴染みの関係を支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	無理に引き合わせることもしないが、外出やイベントを通して自然に関わり合えるような場面を作ることはある。以外にふとした優しさを垣間見ることができる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	現在まで該当者がいなかった為支援の実績はない。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人と一対一で話し出来る限り本人の意向や希望にそうなど、常に本人本位の視点での支援を行っている。	入居者の生活歴などを詳細に把握している。入居者自身意思を表せない方もいるが、表情や行動等で判断している。新しく入居された方で朝食は取っていなかったとか、コンビニでの買い物に一人で行き自由に買い物をしたい等の要望について職員間で話し合いを持ち、入居者の希望を取り入れている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人・家族に今までの生活歴を聞き出来るだけ今まで使用してきた物や大事にされてきた事の継続が出来るような支援に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	バイタルチェック・声掛け等でその日の体調を把握し一人一人の生活パターンに合わせ家事等の日常生活の活動に参加してもらっている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月2回の職員会議時に各利用者の現況を話し合い、その時々に応じた介護計画を作成したりその日の勤務者でアイデアを出し合いケアの工夫をしている。	入居時に本人や家族の希望などを聞き、職員間で話し合い計画を作成している。ユニット毎の職員で意見を出し合い3ヶ月に1回の見直しをしている。状態に変化がある時には随時計画を変更しており、職員には連絡帳にプランが変更になったことを記入し、知らせている。	職員はカンファレンスで入居者の現状を把握しているが、作成された「ケアプラン」を聞くだけでなく、個々のケアプランを実際に目で確かめ、内容の共有化を図ることを望みます。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の介護支援経過記録やバイタルチェック表の確認を行うと同時に各勤務者からの引き継ぎを聞き情報の共有を行っている。又月2回の会議を行い職員間で必要事項については統一した支援を行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族の状況に合わせ柔軟な支援やサービスが行えるよう取り組んでいる。原則、家族にお願いしていることでも家族の都合が悪い時は職員が代行している。		

グループホームあさかわ・あじさいユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	美容室やスーパー等利用者の方が実際に利用したり買い物に行ったりして協働出来ている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医や看護師とはその都度連絡を受けられる関係が築けており、的確な指示のもと適切な医療を受けられるよう支援している。	入居前のかかりつけ医にホーム入居後も往診が可能かどうか確認をしている。ホームの協力医による予防接種を全員で行っている。入居者のかかりつけ医への受診については家族の付き添いを基本としている。また、受診の際には連絡ノートを活用し医師への的確な情報提供をしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	定期的に情報交換出来ている。看護師も利用者の生活状況を実際に見て関わることで把握でき必要に応じた対応を介護職員に指示している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	医療機関に的確な情報を提供すると共に頻繁に見舞うことにより、利用者の状況確認をし病院関係者や家族等と情報交換しながら早期退院に向けた相談に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人や家族の希望を聞き実践に繋げていけるよう努めている。実際に終末期を迎えた利用者がいたが、主治医・家族・職員で話し合いをし最期の看取りを家族・他利用者・職員のいる中で迎えることが出来た。	契約時の重要事項で説明をしている。入居者の体調の変化の都度、家族、医師、職員との話し合いを持ち、今後の方針を決めている。初めは延命措置をしないとした家族もその場になると変わることもあり、話し合いは何度も行われる。今年になり2名の方の看取りを行なった。他の入居者も職員とともに見送った。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	これまでの経験から職員は急変時や事故発生時に速やかに対応できている。新人職員には会議時を利用し勉強会等を行い実践力を身につけられるよう努めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	これまで通り避難訓練・通報訓練・消火訓練・連絡網訓練を定期的に行っている。また今年度は夕食後に夜間想定での訓練を行った。地域との協力体制は協定を結ぶことに拘らず、隣組に入れていただき普段からのご近所付き合いの中で協力体制が築けるのでは、ということ留まっている。	年2回防災避難訓練が行われている。各居室、リビングルーム等にスプリンクラーが設置され、防災関係の機器も整備されている。各居室の入口には絵と文字で表示されたカードが掛けられており、避難時に入居者の首に下げ利用できるようになっている。職員の役割分担については常に読み合わせ確認を行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとり人格が異なることを理解し、その人らしさを尊重し誇りやプライバシーを損ねることのない声掛けや対応を心掛けた支援をしている。	同姓の方がいることもあり、個々に苗字や名前にさん付けで敬意を持って接している。理念にも「その人らしさ(経験・個性・想いを尊重し……)」と謳われており、それに基づき職員は行動している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	上手く表現できない或いは自己決定に迷う等の時は言葉を選び、分かり易く働きかけるよう支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	常に利用者本位を心掛けその人らしい支援が出来るよう努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	定期的に美容室へ行ったり、出かけることが難しくなってきた利用者にはホームへ来て頂きその人らしさを維持を図っている。また一緒に買い物へ出掛け本人の好みの洋服や小物の購入が出来るよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	嫌いな食材がある方に対しては代替りの物を用意し不満がないようにしている。一人ひとりの出来ることの能力に合わせ準備や後片付けをしてもらっている。	ユニット毎の献立が作られている。入居者に何が食べたいか聞いたり、季節を感じられる旬のものを取り入れ調理している。入居者には出来ることをやって頂いている。入居者と職員が隣町まで野沢菜を取りに行き、一緒に野沢菜漬けが行われた。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎日の食事で健康を維持していることを重要視し職員同士で連携を取り献立を考えたりしている。食事摂取量や水分量の摂取が少ない利用者がいた時には摂取量を記録し職員間で量の把握に努め連携を取っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自身で出来る方には声掛けをし、介助が必要な方には一緒に洗面台にて行うなど能力に応じた支援を行っているが無理強いはない。		

グループホームあさかわ・あじさいユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄パターンを把握して必要な方にはトイレへの声掛けを行っている。おむつの使用を減らすため、時間帯でおむつを使用せず布のパンツを使用するなどの支援を行っている。	排便チェック表を作成し、基本的にトイレでの排泄を目指しているため時間等を見計らい誘導している。入居者は布パンツとリハビリパンツを使用している。夜間起きてトイレに行く入居者もいるが職員の見守りが行われている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	飲食物の工夫で予防に努めているが、状態によっては腹部のマッサージ・便秘薬の使用も看護師と相談しながら行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	一人ひとりの希望に添えるように声をかけ入浴してもらっている。予定をしても気分がのらない時は無理強いせず本人の意向を尊重している。	1週間に3回入浴している。「お風呂ですがどうしましょうか」と声を掛け、入居者の意思を確認し入っていただいている。たまに入りたくないという方には無理強いしないで、また翌日同じ声かけで入っていただくようにしている。季節の風呂などで変化をもたせ楽しんでいただいている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	特に午睡は一人ひとりの生活習慣を尊重し本人の意向を聞きながら声掛けを行っている。夜間の入室時刻も個々に応じ精神的・肉体的に落ち着いた状態での臥床に配慮し気持ちよく休んでもらっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	看護師が作成した内服薬一覧表を基に職員は薬の目的や副作用について理解している。氏名・日付等を確認しながらその方の能力にあった服薬支援を行っている。又薬の変更があった場合などは特に症状等に気配りを行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日常の中でそれぞれが保持している能力に応じて役割を持ち生き生きと生活できるよう支援している。嗜好品については家族とも相談し提供できている。ボランティアの受け入れ隣接小学校との交流会・季節の行事の企画・外出・外食等を取り入れ楽しみごとや気分転換を図っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	本人の希望に添い外出や買い物等日常的に行っている。また日常の会話などから行きたい所や食べたい物の把握に努め普段はいけなような場所へは個別の外出で出掛けている。今年は個別ミニ旅行で本人の気になっていた実家のある佐久市御牧が原まで行くことが出来た。	日用品の買い出しに行く時に入居者の希望を聞き、交代で3名位の方が職員とともに出かけている。入居者自身が長い距離を歩くことが困難になり、ホームの前の道を少し歩き戻ってきて玄関脇に置かれている椅子に腰を掛け、日向ぼっこを楽しんでいる。毎年行われているミニ旅行や個別旅行も継続されており、入居者や家族、職員の楽しみとなっている。	

グループホームあさかわ・あじさいユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	職員は利用者が手元にお金がないことへの不安を感じていることを理解している。本人・家族了解のもとそれぞれの希望や力に応じ自己管理や買い物時使えるよう支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人からの希望があれば必要に応じスタッフが付き添う場合もあるが自由にかけてもらっている。家族より贈り物があった場合は出来るだけ本人と一緒に届いたことのお知らせやお礼の電話を入れている。手紙のやり取りは支援体制はあるが今の所利用者自身からの希望は聞かれていない		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	。室内の温度・湿度には注意しエアコンや窓を開けるなど調節には配慮している。玄関や食卓テーブルには職員が自宅より持ってきた季節の花を飾ったり、庭に咲いている花や窓からの景色・風・香り等で季節を感じてもらっている。	玄関には招き猫の置物や、幸せを呼び込むフクロウの置物など飾られている。ユニットには職員の氏名が書かれた写真が貼られていて親しみを感じた。「ゆうわ祭」への出品作品が飾られていたり、交流する小学生からの手紙や作品も飾られている。リビングには炬燵があり「テレビを見る時にはあそこがいいの」と入居者が話してくれた。玄関ホールや玄関脇に置かれた椅子を入居者が頻繁に利用していた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	玄関の内外にそれぞれソファやイスが置いてあったりフロア内にも畳コーナーやデッキ前にソファが置いてあり一人ひとりが好きな時に好きな場所でおしゃべりしたりテレビを見たり本を読んだり出来るようになっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に使い慣れたものや馴染みの家具を持ってきてもらうように伝え、本人が居心地良く過ごせるような環境作りの工夫をしている。	自宅よりお気に入りの物や生活に必要な物を持ち込み居室作りがされている。写真や似顔絵を飾ったり、沢山の実をつけた南天の枝が飾られていたり、着替えの洋服が沢山吊るされたハンガーボードがあったりと個性的な居室になっていた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室入口には入居時に本人と一緒にかけたネームプレートを掛け名前を確認して自分の部屋との認識が出来るようにしてある。トイレの場所が分からない方の為にも表示してあったり風呂場の入り口には温泉の「のれん」を掛ける等の工夫をしている。部屋はもろろん食卓テーブルについては自分の場所の認識が出来ている方が多いためこちらの都合で変更して混乱を招くようなことのないようにしている。		